村上忠順翁顕彰会報

目　次

◎柴田千町の和歌　……1ページ
◎史談会速記録　……3ページ
◎歴史探訪記　……5ページ
◎能谷武至全歌集（抄）　……8ページ
◎人物略記　……8ページ
◎表紙のことば　……8ページ
◎編集後記　……8ページ

村上忠順翁顕彰会報
第12号
編集　村上忠順翁顕彰会
事務局
発行　平成13年3月1日

平成十三年度定例総会によせて

豊田市長　鈴木公平

村上忠順翁顕彰会設立の趣意書が昭和六十三年十二月に作成をみて、新年を迎えて年号も平成と改まった一月に顕彰会も活動が始まっています。

村上忠順翁は江戸時代後期の文化九年（一八一二）に生まれ、明治十七年（一八八四）に七十三歳で逝去されました。

まさに七百年間にわたって歴史の主役を果たした武家政権から新しい社会体制である明治維新の激動期に生涯を過され、専門の医学の他、和歌・国学等の文化人として多大な業績を残され、多くの書を後世に伝えられました。現在の刈谷市立図書館の村上文庫に加え、高岡町の村上家所蔵の千数百冊に及ぶ書籍には、忠順翁の研究書が未知の資料として今後の学問的な調査が期待されます。

この中には、堤村と刈谷城下を往来する多忙な一時をさいて書述した自筆の書も多く確認され、今までの成果に更なる業績が加わるものと顕彰会の研究活動に対する楽しみをいだいております。

平成十一年には「十年のあゆみ」を刊行をみて、忠順翁の人となりや有栖川宮熾仁親王の信任厚かったことがご下賜品や親王直筆の書が残っていることからうかがい知ることが出来ます。

また、大田垣蓮月・大河内存真・植松茂岳などの文人と歌と医学を通した交友を図り、手紙類や歌集から新しい時代の到来をうかがわせる記録も豊かで知識の広さに驚く次第です。

また、忠順翁と親類の縁となった岡崎の深見篤慶や鈴木重愛との学問を通じての親交を記録した文献もあり、これからの課題も多く、定例総会での発表の他に機会をみて世に出していただくことを望みます。

終りに村上忠順翁、郷土文化興隆のうえでの功績の紹介と多くの書が刊行され、顕彰会の充実と発展をご祈念してあいさつといたします。

老幹新枝

村上忠順翁顕彰会会長　石川隆之

青葉薫るさわやかな季節が巡って参りました。会員の皆様には益々ご壮健のことをお慶び申し上げます。

今年度も各事業がご理解とご協力によってとどこおりなく進みました心からお礼と感謝を申し上げます。

昨今、日本社会の政治、経済、世相が混迷の淵に沈んでから早くも十余年の歳月が過ぎ去ろうとしています。少しは良くなるというたぐいの予測は全て外れています。

新しい世紀を迎え気持を新たにして百年の計も早くも色あせて苦難福門とはいえ長すぎるのではなかろうか。

今年、豊田市は市制五十周年を迎えます。先人、先輩達の偉業を顕彰し今日のまちの発展に感謝し周年記念事業が立派に開催されますよう心から念ずるものであります。

村上忠順翁顕彰会は会員の皆様の手によって新たな枝が伸び四方に葉を繁らせ周囲の人々と共に枝一本、葉一枚に顕彰を深めてまいりたいと思います。

終りに皆様のご多幸をご祈念申し上げ会報十二号の発刊のことばといたします。

（写真・右石川、五人目故鈴村光彦さんと共に山室山妙楽寺にて）

柴田千町の和歌

簗瀬一雄

一

柴田家は岡崎市伊賀町の旧家で、代々そこの八幡社に奉仕した。その家の九代が千町、十代が顕光で、ともに西三河に於る著名な歌人であった。千町は雅名で、もとの称は左京久明（初め正直）、隠居の後は萊山・鶯山など号した。この他にも、刑部と云い、松蔭廼屋の号も用いていて、類題集などに、いろいろの名で出るし、顕光の称号ともまぎれ易いのであったが、故熊谷武至氏が、『参河歌塩考證』の中の「三河歌人掃貫記・伊賀柴田家篇」で整理されたのはありがたかった。又、ここには、類題集の類から、千町の作品を多く抄出してあるし、更に同書中に「豊河社奉納百首（柴田千町）」が飜刻されている。千町は明治六年（一八七三）六月六日の歿で、時に六十六歳であった由である。六の字づくめであるのは珍らしい。生れは文化五年（一八〇八）ということになろう。墓は伊賀町向山の柴田家墓地の内にある。

二

故熊谷氏の『参河歌塩考證』に蒐集された資料を材にとって、千町の和歌作品を鑑賞し、いささかの批評をも加えてみた。まづ天保十三年（一八四二）五月に豊川稲荷に奉納された「豊河社奉納百首」から見て行く。巻末に、

此百首のうたをよみてたてまつるこころをにごりなきこころはうけよ豊河にかきあつめたるみくづなれども

と詠み添えてある。「みくづ」は水屑で、水の中の塵芥と云って、作品の出来を謙遜しながら、詠歌奉納の真心は納受したまえと、神に対して挨拶をしているのである。水屑は豊河の川についての縁語である。「にごりなき」も縁語であり、しかも「にごりなき」と「水屑」は対立概念を示す語で、そこに表現の工夫を見せたのである。

早蕨

われのみとおもひし野辺のはつわらびをり過さじと人も来てつむ

「をり過さじ」は摘む好期をはずすまいとしての意で、自分と同じく野べに出ている心を思いやって、やっぱり人もと、軽い気持の同感を、軽くすくい上げたところがよい。

卯花

ほとゝぎすこぞもき鳴きし庭の面のうのはながきを子らよあらすな

梅に鶯と同様に、卯の花と子規は組み合せになるものである。「こぞも」の「も」は並列の助詞で、後に「だから今年も来るであろう」との期待を匂わせているのである。下の句の禁止命令は、来る筈の子規の邪魔にならぬようにしておくれと云う位の気持である。古典から引きついでいる子規に対する期待とその鳴き声を聞きたいという願望の強さは、今日からは異常と思われる程であるが、それを無視しないのが、文化を愛する者のポーズとして通用したのであった。そうした背景を飲みこまないと、この歌は正しくは理解出来ない。

蚊遣火

夕日かげのこるをかべの賤が家に軒のはくらく立つかやりかな

「軒のは」は家の軒の端である。蚊遣火は今日の蚊取線香などではない。地方によって材料は色々あるが、大方は乾燥した杉の枝付きの葉などを、ワーッともやした相を思えばよい。西に傾いた日の光がまだ当っている岡の、麓の方はもう夕闇のさし迫る気配。そして、その縁に近い辺りでくすべる煙が立ち登っている。一幅の風景画と見立ててよい。季節感とともに、夕まぐれ時を迎える時間帯のなつかしい気分がうまくとらえてある。

六月祓

御祓河ぬさうちなびき中巫ののりとの声にかよふあきかぜ

「中巫」は「御巫」の誤植ではないかと思うのだが、「カンナギ」とか「ミカナギ」とか訓ませるつもりであろう。旧暦の六月は夏の終りで、半年の罪や穢をみそぎによって消去しようとする行事が六月祓（みなづきはらえ）である。水無月祓の祝詞（のりと）を奏する巫の声のすがすがしさに、早くも秋の風の気配を感じるという、日本人の最も好む季節の移行期を詠じたものである。これはどうしても、百人一首中の「風そよぐ楢の小川の夕暮は御祓ぞ夏のしるしなりける」（藤原家隆）を思い出させてしまい、余りにも見事な家隆詠と比較されると、大損な訳であるが、充満している秋の気配の中に、今日一日は夏なのだと云う歌に対比する、夏であるのにもう早くも秋の

すがしさが感じられることよする表現をねらったのである。これも文化人の教養的趣向の一つである。

雪

さえ〳〵し志賀の浦かぜふきたえて
ゆきよりあくる大日枝の山

琵琶湖畔の展望の歌で、スケールの大きさが伸びやかに詠ってあるところが好い。「ふきたえて」は散々吹いた果てに、その風が収まったことを現わしている。「ゆきより」は視線の原点が雪であるというので、ここがこの歌のキーポイントである。夜を時間帯を音の感覚でとらえ、朝明けを白雪の視覚表現にしぼって、うまくコントラストさせた成功作である。近頃山梨県に紅富士温泉というのが出来て、冬季に限る由であるが、夜の明けに山頂の雪が紅（べに）の色に輝といって評判になっているそうだ。富嶽百景の赤富士は夕焼で、これも対比の面白さである。閑話休題。

片思

同じ世にうまれしのみを契りぞとおもひなぐさむ身こそつらけれ

「契りぞ」の「ぞ」は終助詞で、ものやことがらを強く指定する語である。末句の「身こそつらけれ」は、係助詞「こそ」を用いた係り結びの強調法の表現である。であるから、結びは形容詞「つらし」の已然形である。こうした助詞を複数使用している場合は、文法から一度きちんと分析して理解する習慣を身に着けておくことをおすすめしたい。教壇からの講義のようだと、嫌うのは誤りである。さて、この歌、受け容れられない恋の嘆きがうまく表現されている。勿論類似する先行歌も多いし、この歌の独自性を認めてほめる訳ではないが、百首歌のような、題詠で数を揃える場合などでは、先ず破綻の無い、腰のすわった詠い振りを認めるべきである。

以上で「豊河社奉納百首」からの抄出を終え、他の資料に散見するものを、順序不同で、少々取り上げたい。

名所月

鈴鹿川一せふたせとくれ初めて八十瀬にうかぶ月のかげかな

段々と夕やみが広がり、全くの夜となるとともに、視野に入る限りの川瀬が月光に輝く美しさに感動した作者の嘆声が聞こえてくるようだ。題詠であるけれども、作りものとは思えないビビッドな迫力があって、よい出来である。嘗ての体験が、与えられた題を得て、脳裏に再成されたものであろう。一・二・八十という数字の配列は一つの遊び心でもあるのだが、時間の経過を空間の広がりとうまく轉換している表現である。村上忠順が編集刊行した『類題和歌玉藻集』（文久元年刊）に千町の名で載る七首の中の一首で、竹尾正久編集の『三河歌集類題』（慶応二年刊）にも「河月」として、出ている。

藤袴

かすが野にいまも匂へる藤袴むかしをとこのかたみなるらん

「むかしをとこ」といえば、伊勢物語の主人公在原業平である。春日野に咲く藤袴を見て、ダンディな風流男の面影を思い浮かべて、こう詠む作者が「紫の色こき時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける」（第四十一段）の歌を記憶していたと考えてもよいが、両首の関係は本歌取りではない。歌詞の「匂へる」は普通は色美しく咲き輝く意に用いるのであるが、藤袴の花が香に立つものであるから、その匂いによって、袴姿の美男のイメージを思い浮べていると解してよいであろう。そこに詠出のキーポイントが置かれている。『三河歌集類題』では、柴田鶯山の名で十首を採ってある。

島蛍

世の中をはなれこしまの蛍たにもゆる思ひハある身なりけり

これは村上忠順編集の『類題嵯峨野歌集』（慶応二年刊）に鶯（鶯）山の名で載っている。上巻の夏の部にあり、季節の詠としてあって、それでよい訳であるが、それだけでは少し平凡に過ぎるようだ。「もゆる思ひ」を恋の心と見るのも又多い。そして、それもどうも平凡だとすると、「はなれこしま」を題の島を「離れ小島」とし、更に「離れ来し間」の掛け詞とすると、「もゆる思ひ」が志士の熱血の情と解されることになり、蛍は島に潜伏している人物の象徴という風に見られる。幕末騒乱の期の詠として、こう見るのもあながち突飛とは云えないので、気付いたまま参考に記してみたのである。千町の人物像が、もっと解明されるべきだと、もどかしく感じる。

○

いまもなほそのうつり香そのこりける衣の里に咲きしさくらは

これは衣の里（今、豊田市に入る）梅坪の太田道貫が桜の古木の置物を香木として、諸方に歌を求め、『三河国衣乃里艶櫻和歌集初編』を編集して、嘉永七年（一八五四）に刊行した中にある。歌は一讀して直ぐ判る。実に素直に詠っていて、気持がよい。

遠山花

白雲とながめ捨てたる遠山の嵐の末

に花の香そする

こうした感覚は、今日ではすっかり忘れ去られているけれども、実は長い長い民族的な生活史が産み出した文化相の一つであると、私はこれを大切に思うのである。わかり易くいうと、大和絵の画く景色を絵そらごとと決めつけるよりも、そうした美の形相を作り上げた長いプロセスを考えるべきだというのである。私の少年時代には、まだ〳〵実景として、これを見ることさえ出来た。東京でも、飛鳥山の遠望がそれであり、薫風の体験は不忍の池で味ったものである。大気の汚染や環境問題の対極にある世界である。

この歌は熊谷氏の著書の写真一枚の中のものであるが、『玉藻集』の第二篇にも採られている。もとの『百番歌合』は万延元年十二月熊代繁里の判であり、同じ年の同じ繁里判の『百八十番歌合』にも、千町（いずれも萊山として）は加わっている由である。柴田に蔵されているもので、早く公表されることを切望して、一まず此の稿は終りとする。

（やなせ・かずお、豊橋技術科学大学名誉教授）

史談会速記録

第一四四輯

（明治三十七年十一月二十九日）

吉木竹次郎速記

明治三十七年七月三十日午后三時一同着席深見愛子君臨席

一村上忠順君維新前後国事勤勞の事蹟　○大総督有栖川宮御東征に扈従せし顕末

深見（愛子）本會の趣旨に副ひますか如何か判りませぬが、それは皆様の御取捨を願ひまして、私の父忠順が維新の際錦旗に駿府城に追随して大総督宮に扈従し奉りました折の事を實父から聞きました記憶の儘を申し上げます、

慶應戊辰の春三月廿日頃でありましたが、大河内潜（現今の男爵北畠治房君）が参られまして申されますに、有栖川宮中務卿熾仁親王の思召

黙止しがたく、多くの同志を京都二條城に居ります某の隊に預け置きまして、宮の御許に赴かうと思ひますが、親王の仰せに扈従者の中に古典に明らかなものが無い様であるから忠順を誘ひて来いとの仰せに此處へ廻って誘説に来たと、そこで父忠順が申しますに田舎固陋の一書生到底王佐の戈器となる事は出来ないが、併し腐った縄にも採るべき所もあらう、まして親王の仰言があったからには御辞退を申上げられやうかと決心いたしまして姻戚鈴木保を從へて其翌朝人々と共に出立致しまして、同月廿四日の夕方駿河城に参着いたしました、翌廿五日参謀局から近日英公使某が大総督宮に参謁に参ると云う事であるから、其節は諸陣共に静粛にするやうにと云ふ三ヶ條の掟が出ました、其時より前に参謀西郷吉助江戸より帰陣致しました、其以来陣中での流言に西参謀卿は勝安房に謀られて、天子と幕府との仲裁を外国人の手に假る事となったと皆々申ました、さうして内事を外国人などに彼是手を着けまする法はない、殊に天幕調停などとは君臣の名義を濫るものである、且幕府と云ふものは今は倒れた同様である只残族のみであるドウして仲裁という事が出来やうと申す者が澤山ありました、其時に排外の夢が覚めない人々が英国の公使が清水港に来船するを期として祝砲交換の時に此方よりは實丸を放って彼を撃沈しよう、それを合図に参謀等を殺し師宮を擁立して攘夷の檄を傳へて先帝の叡旨に答へまつろうと、密かに同志を集めた者があったと云ふ事を大河内が聞きまして大に驚いて左右の宮人に質しますと未だ明かには判らないが密かに其企があるようである、併しまさか實行する事は出来ますまいと答へました故、大河内は是は捨て置かれないと直に御前に伺候して其次第を言上致しました、すると宮様も亦大に驚かせ給ひまして、急に其主謀と云ふやうな人々を御召出になりました、其隊に大河内が左の御親書の草稿を草して上りました、

此度英公使面謁之事申来り其情宜未ダ不分明先月遂参朝候事故今更於當府相拒候節ハ却ヲ叡旨相悖リ且賊徒未平之折柄不慮之変出来候テハ不容易之一大事ト熟慮ノ上英人参陣候ハバ可遂面會決意候就テハ面會ノ節秤ニ碇舶中共此旨堅ク相守決シテ動揺且粗暴之振舞無之様相頼候事

右の御親書が出来上る頃には早一同（廿餘名乎）御前に参候致しましたから宮様は大河内に御授けになりました、大河内は之を朗讀致しまし

た、すると某々の隊長等御教書を部下の者に親しく拝見致させたいと願ったさうでございます、大河内が帰って来て右の案を忠順に示して申しますに、彼の頑固の者共も此御令旨に頼むと遊ばしたのに大層感激したやうであるから假例公使が来ても必ず粗暴な事を爲る気遣はないと思ふが、又よく考へるに宮様は陛下が御幼冲に渡らせ給ふから萬桟を総裁し給ふである、それ故御威望の盛んなる事は他に比類がない、諺に林中の大木は、風の爲めに吹かるゝと云ふから旗下から斯様な者共が起った以上は、何時如何なる訛言が京師に傳はらないとも測られない若しさう云ふやうな事があれば帝に御忠實な宮様の御身の御不幸ばかりでなく世の中がまだ穏にならない時であるから其禍ひの及ぶ所も計られない昔景行天皇の御代に日本武尊が御東征の際伊勢の神宮を参拝あらせられた例にならって任務冥助の祈願使を御遣はしにならうと申す事になり、其御誓願文を起草せよとの御命であると申されました忠順は感泣しまして仔細に台意のある處を諒し、至誠純一皇運の隆盛と賊徒誅滅の奏功を旨と遊はさるゝに就て冥助を垂れ玉はん事の由を畢生の力と誠心とを以て起草して上りました、宮様は之を御覧遊ばされまして余の心を得たりと御嘉納遊ばされ、三日の間沐浴斎戒遊ばされ御親書を御認め遊ばされましたそれと松浦主膳廣田彦丸の両人に持たせて伊勢の両宮及び熱田の宮に御遣しになりました後で承りますに此時内宮等が商議して使者に向って昔から封函の告文を神納した例がありませぬから開封して御渡し下さいと申したさうで、すると松浦主膳が是は親王の親ら封し給ひし所であるから我々が漫に披く事は出来ない、詰り封緘の祝詞は前例がないと云ふに止って制禁があると云ふではないから拒まれる理由がないと申しました其時に廣田彦丸は傍の料紙を取って「熾仁の皇子の命は大君の御代安かれの外なかりけり」と書いて出しましたら此歌と共に一間に携へて入り封緘の儘奉納致しませうと申して、前に拒みました粗忽を謝したと云ふ事でございます、

偖西の丸御在城中は日々宮様の仰言を承り何くれと御話申上げ仕へて居りました、其の中に夏の初より秋の末までに東北戦争も済み世の中も追々穏かになりまして江戸も東京と改められ明かに治まる御代となりました、其年即慶應四年九月でありましたが天皇陛下東京へ御幸あらせられました、十二月二日に大総督宮は御参内遊ばされました、其節宮様の御詠に

武藏野にかはねさらさむと
思ひしを御幸かしこく
あふくけふかな

其時の御宸翰に

春来軍務委任之處能々衆議を容れ盡策籌其宜を口東北速に平定之功を奏段令感賞候事

（此御宸翰の中宜をと東北との間に「得」とあるべき様に思はるれども供奉日記には本文の如くに付其儘に寫し取り置きたり）

とございましたさうであります、それから十二月五日に宮様凱陣し給ふ事になりまして、私の親族鈴木保は御旗衛士、亡夫藤十は御馬標衛士の命を蒙りました、御供の人々は何れも御下賜になりました黒羅紗の三才羽織紫吳呂服の袴を着け韮山笠を用ひたと申す事でございます、其月十八日に三河国岡崎の本陣に御着になりまして、畏くも私の子供まで拜謁仰付られ且御手づから御菓子などを賜はりましたのは實に一族の光榮とする所でございます、其翌日熱田へ御着、宮様は海藏門から御下馬遊ばされ神前に御進みの上御参拜あらせられましたそれから廿三日に鏡驛の本陣に御宿り遊ばされました折、親族兒嶋基隆を御前に召出され畏くも御言葉を賜はりました、親族共其喜びとて酒酌みかわしました、其肴の中に氷魚がありましたとて父忠順は

官軍にひをへて君が
つかへこしけふのことほき
萬代までに

基隆は

ひをへてもわすれむものか
萬代の家つとにせむ
君かことの葉

亡夫藤十は

とり〳〵にかくはしきかな
ひをへつゝつかへしきみか
ことの葉の花

其時に矢張親族で御軍の軍事目附を仰付られました丸茂經忠が参りまして

かねてより君かこゝろを
みがきつゝ月日をへたる
かひはありけり

と詠みましたさうであります、かくて廿五日に宮様は御道中の御恙あらせられず目出度京都に御安着あそばされました其節の御列の順序は次の通りであったさうでございます、

御入殿御列

○目附・丸茂庫司・加藤某・添板倉信太郎・○諸藩兵隊○隊長騎馬○御使番騎馬○御旗持四人・力士田邊右

近・力士渡邊楽之助・三松三郎・兒嶋信太郎○御旗衛士十三人、鈴木保・筑柴速雄・田中鐵之助・記田信太郎・林榮・高田小三郎・富永勇太郎・浅井千葉之助・栗井左右字・觀沼貫一郎・万代藏六・小佐野壹岐・田邊近江○口付御先乗従者○御馬標持六人力士岡本太郎・力士小澤伯耆・武田小太郎・深見藤十・出澤幸三郎・豊島伊惣次○稲田隊十人・池田・土岐・林・山崎・飯田・都志・松井・友田・大澤・有馬○傘村上忠順・宮崎某○御床机○御敷皮○御引馬二疋○手明馬役二人・手明馬役二人○諸太夫二人騎馬・従者四人宛○御茶辨・小頭二人○銃隊・鴨高・一小隊○諸藩兵隊○隊長騎馬　以上

右の順序で京都へ御着になりますと、堂上方は騎馬にて御出迎になりまして、三條橋御通行の折柄御言葉がございまして木屋町を上つて御進みになりました、軍務官から建てられました稽古場の前では火筒の音喧しく、丸太橋の上には兵士が整列して凱聲を三度揚げたさうです、すると拝観の郡集が之に和して其聲天地に轟きわたり其勇ましさは何とも譬へようのない位であつて、其時のやうに喜ばしく嬉しかつたことはなかつたと實父が常々申されました、其日凱陣を祝ひ奉りて實父は

千萬のいくさことむけ
　かへらせるけふのよことは
　　国もとゝろに

亡藤十は

　国のあたうちたひらけて
　かへりますみやこ大路は
　　にきはひにけり

と詠みまして二首とも短冊に認めて上りました、翌廿六日忠順も藤十も参殿仕りまして国産を奉りましたら御前に召されて御言葉を賜はりました、それから又既に天下御平定になりましたから御暇を願ひましたら、又大前に召されて懇ろなる御言葉を賜はり且つ白縮緬等の御下賜品がございました、眞に感泣に堪へなかったと申されました、

猶少しく忠順の事に就て申上たうございます、大和一擧の際などに浪士たちを潜伏いたざせ置きまして、徳川氏の嫌疑を受けた事がございましたが、併し嫌疑のみで別段何事もありませぬでしたが、明治五年の三月四日に額田縣から堤村の村上方へ捕方が四十名餘り参りまして、先私の弟忠淨を縛しまして、親忠順をも縛せようと致しました、其時父が申しますには何等の罪でございますか一向其意を得ませぬ、此多勢の捕方は合点が行きませぬ私は只一人御出でがあつて額田縣へ参れと仰しゃれは逃げも隠れも致しませぬ、何故に捕方が斯う多いのであるか合点が行きませぬ私はまだ今朝食事も致しませぬから暫時御待下さいと申しましたら夫れならば食事をなさるゝがよいと、それから食事を致しまして家内に種々言ひ置く事も御座りましたり致しまする、其中に家の中を始め土藏文庫に至るまで捜索が直に厳密でございまして皆封印を致して仕舞ひました、實父が申しますには神前と霊前に行く道だけは明けて置いて下さい、それまで封印せられては日々の禮拝供物にも困りますからと申しますと、それだけは明けて置かうと云ふ事で其途だけは封印を致しませぬでした、彼此致して家の中を何處もかも捜して書き物や手紙などを残らず出して見ましたが、何も怪しい書き物もなかつたさうでドウ云ふ譯であろうと思ふて居りました、それは維新前にも始終正義の有志が折節参りまして弟忠淨は此人等に幾らも親密な人がありました、其等の者が其頃尊王愛国の情に驅られ慷慨の餘りに国家の為めに種々事を謀りました、其中に伊勢の神宮を他に移轉したいなどと云ふ企の者が澤山おりましたさうです。

次号につづく

歴史探訪記

〈忠順の足跡をたずねて〉

さわやかな秋風とともに山から赤トンボが里へやってくるころ、私たちの忠順翁顕彰会恒例の歴史探訪は旅立ちを迎えます。

今年度は、回を重ね十二回となりました。忠順翁を顕彰するため毎回忠順の日記にしるされた足跡をたずねて多くのことを顕彰しました。会員自らも色々なことを学ぶことが出来ました。今回は十一月九日好天に恵まれ会員四十名は共々バスにて再び伊勢の松阪を訪ねました。過去同じ地を探訪したのは、忠順と大田恒蓮月の交友を知るため京都神光院を訪れたことがあります。

さて、再度松阪への誘いは、村上家に保存されている「山室山詣日記」でした。この日記は、度々候補地として話題になったもののいつも後まわしにされて来ました。

この日記は明治八年（一八七五）三月松阪市の郊外にある山室山の山頂に新らたに建造された山室山神社の「神遷の儀式」に忠順を始め西三河・東三河から十名余が参拝しました。日記には足をのばして伊勢神宮を参拝したことも記され、又九十三

首の短歌も添えられています。ときに忠順六十四才、篤慶四十七才でした。旅は八泊九日、道のり七十七里半（三一〇キロメートル）の旅でした。

会員一行は、予定時刻をやや遅れバスは出発し車中では、今日のために用意した「研修のしおり」の説明を聞き、会員の皆さんは日記に思いを馳せ伊勢路遥か松阪へと快調な旅をつづけました。午前十時半ころには予定どおり目的地の山室山ふもとの駐車場に着きました。

この山室山詣日記については「村上忠順集・紀行篇」に次のように解説が付されています。

解説「明治八年五月、山室山神社が官許になり、その神遷行事があった折に、篤慶は忠順とともに参列した。忠順の記録は刈谷市立図書館蔵の「蓬蘆雑抄」九十三の中に見えるがこの日記は、足をのばして伊勢に参宮し、船路を三河一色まで帰ったことを記している。十字詰十五行を片面とする原稿用紙三十四枚を袋綴ぢにした市販手帳である。七・六×一六・三cmの横丁にカラ押ししてあり、背はくるみ綴ぢになってゐる。こうした帳面が数冊保存されて居りその一冊のはじ十三丁分にこの日記が存する。雑記帳であって、一冊にはいろ〳〵のことが記されて居るために、この日記の終りもはっきりとはして居らずつづいて廿六日の記事が記されてゐるが帰宅をもって、一応の区切れとした。

植松有信の「山むろ日記」かゐ、この「山室山詣日記」をみて、現在の山室山の様子をくらべて思ふと歳月の流れにおどろくほかはない。さういう意味でもこの記は有意義であらう。山室山への道しるべの石柱も軒下になってしまってゐて、車で行けば見失ひがちである。妙楽寺の下には駐車場も出来た。忠順や篤慶の心持とはすべてを変へてしまってゐる。」　以上

ここ山室山は、現在「ちとせの森」といい松阪市が市民の憩の場として整備し頂上近くまで車道（バス不可）が設けられ舗そうされています。

頂上には、今から二〇〇年前の享和元年（一八〇一）宣長の遺言により造られた「本居宣長之墓」がある

この山頂に、明治八年、秋津彦美豆桜根大人（宣長）と神霊能真柱大人（平田篤胤）を祭神とする「山室山神社」が造営され、その神遷之儀式に忠順・篤慶ほか三河から遥々参列した。その日記が篤慶の山室山詣日記であり、今から百二十六年も前のことです。

会員一同は山頂をめざしました。道は旧参道と広いゆるやかな新道があり健脚を自称す人々は急峻な旧参道を登った。全員の登頂は正直なところ一寸と心配であったがそれは無用なことでした。全員登頂。

槍の多い山頂付近は桜の紅葉がひときわ映え梢之越しには遠く十二万石蒲生氏郷の城下町が開け遥か伊勢湾の眺望はすばらしく一行の疲れを癒すには充分でした。残念なことに忠順翁が列席し建造をみた「山室山神社」の跡は見えず、その位置すら特定する標もなかった。ただ旧参道には風雪にたえ苔むした二本の「山室山神社道」と記した古い石柱がたたずむように残っていました。

会員一行は、山頂に立ちしばし往時を偲び「本居宣長之奥墓」に詣でさわやかな山みちを下山しました。

この奥墓のとなりには宣長の死をしのんで七日七夜その墓を守り続けたという門人の植松有信の碑があり今もなお守り続けているように見え師弟愛の尊さをつくづく知らされる思いでした。合掌

旅の様子やその足跡はこの日記に次のように記されています。（日記抄）

まず日記の前文に、羽田野栄樹へ来状之写と題を置き、伊勢の国度會県大属川口君。上略、今般僕等同志の輩、伊吹舎御門人野口萬次郎・鈴の舎御門人久世安庭・同岡村美啓・有志垣本基楽・同川口常文ら五人爲申合、山室山ニ両大人本居大人御本廟平田大人御本廟之霊社ヲ営建社造方ハ神宮末社に倣ヒ板屋根千木カツヲ木ヲ用ユ山室神社ト相称へ、仕へ奉り度、段官許

ヲ蒙リ候。御同慶可被下候。然ルニ、右修営之義、当月中旬ニ出来ニ相成候ニ付来ル廿一日ヲ生日乃足日ト祝定テ、神迁之儀式可成丈盛大ニ執行仕候積ニ候間、此段御報知申上候、依而者老先生ニモ御参宮旁、右当日ニ御参詣被成下候半々弥以テ一同大慶ニ奉存候。下略。以上のとおり、この文は山室山神社建造の発起人五名の連書で東三河の羽田野栄樹（敬雄）に宛てた案内状です。

日記はつづいて三河国碧海郡堤村神明宮祠官兼少請義村上忠順作、長歌一首（略）を記しています。

更につづいて短歌十九首（忠淨、篤慶、登志野など十七名）が詠まれています。その内三首

上つ代のミちのおやなる大神といつきまつらす山室の山　忠　淨

いはひまつる山室の榊ハのさかえハしるし万世までに　登之野

世のちりもこゝろのあかも大神のめぐミのつゆにあらひすゝがむ篤慶

十七日　日いとよし（旅立ち）

ともにゆかむ山室山の神もふで心ばかりを君にゆだねて

帰り来てかたるぞまつ山室山より高き神のミいづを

十八日　空はれたり

ことなくて神のミまへにもうでなばとくかへりこよゆびをりてまつ

としのめ

鳴海にてやすらひ熱田大神をはろかにをろがみつゝ西福田、桜や儀八にやどる

十九日　ウス曇りナリ

さや川を舟に乗りて渡る、桑名京屋につく、富田あづまや焼蛤うまし四日市駅帯屋に休て神戸屋にやどる。

廿日　日いとよし。梅をミて

久かたのはるの日かげものどかニてうめ咲にほふ玉がたのさと

小川にて酒のむ比風寒し。松坂なる大和屋にいたりて日高けれどやどをかる。並の間旅人の声す。から紙のほそ目より覗きて入りきたるハ菅沼氏なり、こハ額田郡の神主たち柴田、佐藤、楠など誘ひて山室山にもうでたるにてとも〳〵よろこびあへり

廿一日　四方はれたり

酉の刻（午後六時ころ）神社儀式ヲ執行。以下省略（日記には儀式の様子が詳しく記され忠順も篤慶も行列に加わり重要な役目を果しています）

廿二日　曇りがちにて行く

くし田にいたるころ雨しきりにふる。道いミじうわるし柳屋に酒のむいとうまし。宮川過て山田の角やにやどる。よも雨ふる

廿三日

百千鳥さえづるこゑものどかなり

山田の原の春の曙

鶯も神ぢの山をことほぎてなくねうれしき春の夕ぐれ

夕つかた桜ミて、外宮にもぬかづき角やにやどる

廿四日　暁鶯のこゑに覚て起いづ

神やしろ大嶋屋にいたりて舟にのる。四方晴わたりて、いとのどけし山々はかすみのミ棚引て、日うらゝか也。二見のうらをわたるころ

朝げたく二見のさとのけぶりこそあさまがたけのかすみとハなれ

いせの海しの嶋かけてうす〳〵とかすむや雪のふじのねもミゆ

三河ぢや一しきのうらに舟よせておぼろにかすむ月をミるかな

漁舟をよびていをなどもとめつゝものす。やがて日もくれぬ

廿五日　朝曇り、ひげすり髪など解つゝいづる此ハ七時ばかりか。西尾の市町にぎハゝし。前津のわたしを越て家にかへるころハ、十一時計か。土産もの分く。麻納て天降宮に礼参、夜に入酒のミつゝぬる

以上が日記の概要です。

会員一行は、正午をむかえるころ松阪市内へ移動し、松阪牛の店、和風レストラン「翠松閣」で昼食をとり、午後の日程（自由行動）に移りそれぞれグループごとに松阪城趾、本居宣長記念館、本居宣長の宮（注、旧山室山神社）など市内の史跡を見学しました。午後二時を少し過ぎたころ総ての日程を終え心地よく疲れた身をバスにゆだね、孫へのものらしきみやげも見えるバスは松阪に別れをつげ今日一日の研修は無事終りました。

たずねこし山室山の神やしろ

いしぶみのこし秋風のふく

いせ路きて老の身やすむ忠順は

儀式むかえん松阪のやど

つつがなき旅に感謝しつつ

事務局記

熊谷武至全歌集（抄）

奥墓の桜は枯れず杉間にのび
たちて梢に日のとどく見ゆ

忠順の山むろの記をよりどにて
なき建物をはかることもす

なきがらと土をへだててなげき
つつ七日こもりき尾張より来て

見えぬ目にこの墓にたちしいく
たびか歌碑一つなき年月にして

樹敬寺を経て山室へ歩ままく
思ふのみにて年をすぎきつ

駅部田すぎて野路ゆく御柩の
松明のあかりのつづきしもいう

視力なく柩にそひしかなしみの
一人といへど五十歳過ぎぬき

祖父の七日こもりし「山室の記」
の序にみえてかなしびもなし

墓よりも高きしるしの石をたて
かくはばからずすでに久しき

文庫よりいだし給うに忠順の
遺稿の紙魚の散るをぞにくむ

おびただしき遺稿にむきて三日あ
りしこの驚きをなつかしまむか

忠順も利亮もまぎれなき文字の
短冊のこるともに医にして

歌よみて家かたぶけしとそのす
ゑの自らいふを訪ねきて聞く

熊谷武至（一九〇七～一九八三）先生は、昭和四十四年「村上忠順集」を簗瀬一雄先生と共編されました。

今回、平成五年発行「熊谷武至全歌集」より本居宣長の山室山奥墓、山室神社、村上忠順に関する歌を抜すいし紹介させて頂きました。

人物略記（未定稿）

村上忠淨（一八四七～一九二三）
忠順の三男、通称正賢、父の医業を継ぐ。高岡村長事務取扱い、郡会議員、県会議員など勤める。前林神社「遷祠碑」忠淨識（一八九六）あり。

深見篤慶（一八二八～一八八一）
忠順の長女年之（愛子）を妻とす。通称藤十、幼名友三郎、松塢と号す。尾張知多郡阿野村外山三輔の長男に生る。忠順の門に入り国学を修む嘉永四年（一八五一）三河碧海郡新堀村深見籐重善恕の養嗣となる。
歿後有栖川宮より「終始一誠意」の五文字を授けられ、この碑を酒人神社境内に建つ。従五位受章。

深見年之（愛子）（一八三三～一九一一）忠順の長女。深見篤慶の妻。

鈴木重愛・忠順の次女小鈴の夫、住、堤村新馬場

鈴木重節・別名節太郎、重愛の長男。

深見恭次郎（一八二八～？）
別名篤恭。明治五年九月酒人神社祠官となる。住、新堀村

外山三助・忠淨の妻よねの実家？深見篤慶の父三輔？住、現豊明市。

菅沼真澄・神主？住、額田郡岡崎町大字両町、山室山詣日記にこの名あり。

柴田顕光（一八三八～？）
別名兵部、稲夫。大正二年岡崎伊賀八幡宮神官となる。代々八幡社に奉仕（九代千町、十代顕光）。平田の門人。古橋暉兒歿後一年祭（明治二十五年・一八九二）十二月二十四日のとき祭文を読む。歌人。額田神職界のリーダー。住、岡崎。山室山詣日記にこの名あり。

佐藤三郎・神主？住、岡崎亀井。山室山詣日記にその名あり。

進藤寛澄・神主？住、岡崎。

表紙のことば

山室山には、樹敬寺の隠居寺といわれる妙楽寺がある。聞けば今は無住の寺となり僧侶が通いで務めているという。山室山神社参道はこの寺の前を通り山頂につづく。

忠順もそして御神霊を移す神遷儀式の長い行列もこの道を粛々と登ったであろう。今は、遥かなる時空をこえた雅びの古式絵巻が浮かびます。

編集後記

21世紀を迎え皇紀は二六六一年となった。日本の歴史を踏え気がつけば寿命がのび出生の少ないいびつな社会になっていた。本来集団で暮す社会の基本が乱れ過去の良い社会を支えた心のよりどころ神仏崇拝はどこへやら、釈迦入滅の「末法」の世さえ感じさせられる。

国学を志した忠順は、世に多くの書を残し多くの交友をもった。

さて、今号も簗瀬先生より原稿を賜り巻頭に紹介した。この縁は忠順の山室山詣につながった。柴田千町の次代顕光は忠順と山室山神社神遷の儀式に参拝していた。この新らたな顕彰に喜びを感じつつ。事務局記